

# 備讃瀬戸及び沿岸地域出土の飯蛸壺

乗松 真也

## 1. はじめに

飯蛸壺の研究は、近畿地方出土資料を中心に古くから行われてきた。なかでも、3つの形態に大別し、その時期的な変遷について述べた森氏の研究（森1950・1963）は現在でも広く受け入れられている。

本稿で対象とする備讃瀬戸地域での研究は、海底から引き揚げられた飯蛸壺の資料紹介（山本1969）に始まる。さらに、近畿～北部九州を対象とした総括的な研究（和田1982・西口1989・真野1989）の中で、本地域の状況について触れられ、播磨灘の同時期のものと比べると、吊手部が小さく、胴部の丸いものが多いといった地域性が指摘されている（西口1989）。

その後、本格的に遺跡出土資料を用いた研究は、下川津遺跡の発掘調査で得られた資料を対象として行われたが、そこで明らかにされた製作方法の差異が時期差と結びつく確証はないとされている（大久保1990）。つまり、飯蛸壺の時期的変化は見出し難いというのがこれまでの見方であり（西岡1989）形態から時期決定を行うことは、ほぼ放棄されてきたといえる。

一方、現在の飯蛸壺縄漁で漁期によって異なる容量の飯蛸壺を利用することに着目した松岡氏は、備讃瀬戸地域、及び淡路島北淡町沖の海揚げり資料と小豆島土庄町で現用の飯蛸壺の容量分析から、本地域の容量が小さいことを指摘し、飯蛸壺縄漁が夏期中心に行われていたためと推測した（松岡2003）。

本稿では、飯蛸壺の帰属時期を明らかとすることを目的として形態分類を行い、時期的な変遷を確認することとする。さらに、各類型の備讃瀬戸地域での分布域を押さえる。基本的には、発掘調査が行われ、出土状況・共伴遺物により時期が限定できる資料のみを用いて分析を行う。

また、容量分析から導かれる漁期の問題についても、時期の判断できる古墳時代後期～中世の資料を用いて若干の考察を行うこととする。

なお、本地域では7世紀初頭に釣鐘形（森氏の3類）が出現し、その後中世までは確実に釣鐘形が使用される。コップ形（森氏の1類・2類）のものも少量存在するが（真野1989・松岡2003）、本稿では主流をなす釣鐘形のみを分析対象とする。

## 2. 分類と編年

### 1 類

厚く扁平で、体部に比してやや狭いだけの幅の吊手部をもつ。吊手部・体部間には境があるものの、体部から底端部にかけてのラインは直線的で、2類のように丸みを帯びない。外面は基本的にはナデによって仕上げられるが、やや指オサエが残るものもある。

吊手部上面にある窪みの形成手法によって細分が可能で、棒状工具のよるものをK I 1 型式（川津一ノ又遺跡 区1 S R 01出土資料基準）ナデによるものをK I 2 型式（川津一ノ又遺跡 区S D 010下層出土資料基準）とする。

本形式の存続幅は、2類とほぼ同様の7世紀初頭～中葉であるが、共伴遺物からはK I 1 型式とK I 2 型式の先後関係が判断できない。ただし後述する2類の吊手部上面の窪み形成手法の変遷を参考にす

	<div> <div>1類</div> <div>2類</div> <div>3類</div> <div>4類</div> <div>5類</div> <div>6類</div> </div> <div> <div>SK 1 型式</div> <div>SK 2 型式</div> <div>SK 3 型式</div> <div>SK 4 型式</div> </div> <div> <div>K I 1 型式</div> <div>K I 2 型式</div> <div>K I 3 型式</div> </div>	S = 1 / 5
7 c	<div>7類</div> <div>SK 7 型式</div> <div>SK 5 型式</div> <div>SK 6 型式</div> <div>NK 型式</div> <div>KM 型式</div>	
8 c	<div>9 c</div> <div>10 c</div>	
9 c	<div>GH 型式</div> <div>KN 型式</div>	
10 c	<div>8類</div> <div>G I 型式</div> <div>T E 型式</div> <div>K K 型式</div> <div>OU 型式</div>	
11 c		
12 c 13 c		

第 1 図 飯蛸壺変遷図

れば、K I 1 型式 K I 2 型式の型式学的変遷を追うことができる。

## 2 類

厚みのある台形状の吊手部を有し、吊手部と体部の間には明瞭な境が認められる。底端部が内傾することにより体部がやや丸みをもつ。サイズは1 類同様やや小型である。外面はナデによって仕上げられているものの、若干指オサエの痕跡が残る。

本類型は、吊手部上面の窪みの形成が棒状工具によるもの（S K 1 型式）と、ナデによるもの（S K 2 型式）の2 者に細分できる。前者は下川津遺跡 S H 55 出土資料を基準資料とし、後者は同遺跡 S H 03 出土資料を基準資料とする。

S K 1 型式は本地域における飯蛸壺出現期である7 世紀初頭に認められるが、S K 2 型式は7 世紀中葉に見られるのみで、本類型はそれ以降に継続しない。

## 3 類

体部とは明瞭に区別される方柱状の吊手部をもつ。底端部はやや内傾し、内面の底端部よりやや上位を強くナデることにより、底端部の器壁が厚みをもつ。外面はナデによって比較的丁寧に仕上げられる。

本類型もやはり吊手部上面の窪み形成手法によって細分される。K I 3 型式（川津一ノ又遺跡 区 S D 010 中～下位出土資料基準）には棒状工具による窪みが認められる。S K 3 型式（下川津遺跡 S K 08 出土資料・金蔵寺下所遺跡 S R 02 期流路出土資料基準）にはナデによる窪みが認められる。一部のものは、窪みをつくるというよりはむしろ、吊手部上面両端部をつまみ上げることを意識しているように思える。また、ナデによって平坦面が形成されているものもある。いずれにしても、この型式では「窪みの形成」が必ずしも意図されているわけではないようである。

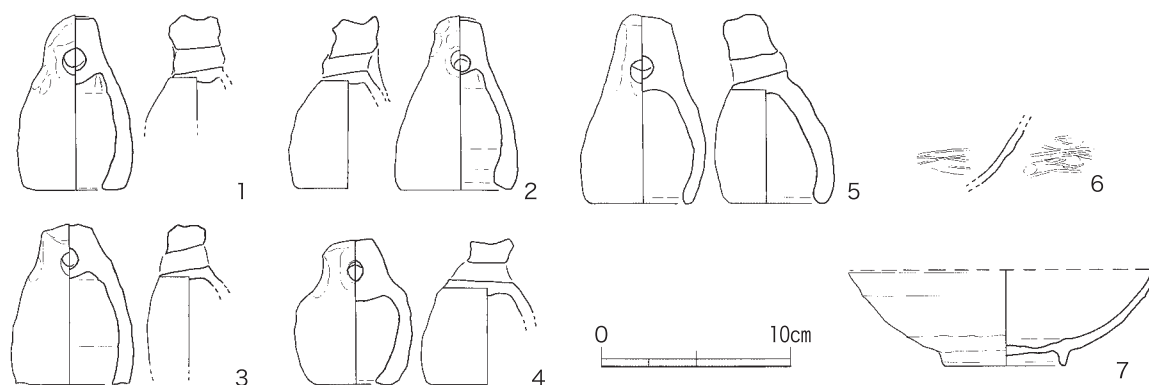
T E 型式は、手島 E（香川県丸亀市手島町）採取飯蛸壺を基準資料とする（第2 図）。本資料は丸亀沖にある手島南西部の海浜で採取されたものである。崖面から崩落した土坑と考えられる土塊中に飯蛸壺のみ17 個体以上が含まれていた。さらに崖面に残存する、土塊と同様の色調・含有物を有する層から瓦器碗小片と土師質土器碗が採取された（註1）。

飯蛸壺には、吊手部上端面はナデにより明瞭に窪みが認められるもの（1・2）と、やや窪むもの（3・4）および平坦面が形成されているもの（5）がある。色調はにぶい褐色で、胎土中には径3.0 mm 以下の石英・長石を多量に含む。器高がやや低く、底面形が隅丸三角形を呈する4 のようなイレギュラーなものも存在するが、基本的には同一の技法で製作されたものと考えていいだろう。

飯蛸壺に共伴する和泉型瓦器碗（6）は、内面のヘラミガキがさほど密ではないことから、尾上 期 - 1（12 世紀第4 四半期）と思われるが小片のため断定はできない。産地不明の口クロ成形による土師質土器碗（7）は、十瓶山窯産碗の口径・器高（佐藤2000）を参考にすれば12 世紀後半に位置づけられる。

## 4 類

吊手部は、明瞭につくり出されるが、3 類型のようなしっかりとした方柱状ではなく、上端部にかけてややすぼみ、扁平になる。よって吊手部上面は狭小となる。体部は上位から底部にかけてやや広がり、底端部は若干内傾するか、もしくはほとんど内傾しない。



第2図 手島E採取遺物実測図（S = 1 / 4）

S K 3 型式（下川津遺跡 S H 51 出土資料基準）の吊手部上端面には棒状工具による明瞭な窪みが認められる。S K 6 型式（下川津遺跡 S K 14 出土資料基準）は、吊手部上面にナデによる若干の窪みか、もしくは若干の平坦面を有する。器壁は S K 3 型式に比べて薄い。K K 型式（空港跡地遺跡 S X e01 出土資料基準）の吊手部上面には窪みや平坦面が見られない。

#### 5 類

吊手部から体部にかけてのラインは直線的に連続し、他類型に比べてスマートに映る。底端部はやや内傾する。

S K 4 型式（下川津遺跡 S H 08 出土資料基準）は、吊手部上端面に棒状工具による窪みが認められる。外面には指オサエが残る。N K 型式（西久保谷遺跡 S D01 出土資料基準）の吊手部上面に認められる窪みはナデによるものである。

#### 6 類

吊手部は体部をややつまみ出すように形成され、体部との明瞭な境は認められない。よって吊手部上面は狭小で、丸みを帯びて仕上げられているか、もしくは若干の平坦面が形成されているのみで窪みは看取されない。内面の底端部よりやや上位には強いナデが施されているが、同様の調整が行われる 3 類型に比べて底端部の器壁は厚くない。外面はナデにより丁寧に仕上げられている。

K N 型式（川津中塚 S D 12 出土資料基準）は、K M 型式（小山・南谷遺跡 S E 701 出土資料基準）に比べて体部がより直線的で、全体的にスマートに見せる。ただし、底端部は若干内傾する。また K N 型式には、体部片面に孔から下方に伸びるヘラ記号が描かれている。大浦浜遺跡 S Z 04 出土資料を基準とする O U 型式は、K N 型式との明確な差異を見出すことが困難であるが、あえて特徴を挙げるとすれば、K N 型式よりやや胴部が膨らみ、外面の仕上げがやや粗く、指オサエの痕跡が残るという点であろうか。

本類型は、7 世紀末～8 世紀初頭に K M 型式が出現し、連続する資料が確認できないものの、9 世紀後半～10 世紀前半に位置づけられる K N 型式に繋がるものと考えられる。後述するが、K N 型式は点的ではあるものの、備讃瀬戸地域一帯に広がる型式である。

## 7 類

半球状に形成された土器の体頂部を押しつぶして扁平な吊手部がつくり出されている。

S K 7 型式（下川津遺跡 S K 08 出土資料基準）は、吊手部上面にナデ（指オサエ）による平坦面が認められる。体部はやや扁平で、底端部はやや外に広がる。外面には指オサエの痕跡が明瞭に残り、全体的なつくりは粗い。

G H 型式（郡家原遺跡 S D 191 出土資料基準）の吊手部と体部は連続し、両者の明瞭な境は見られない。吊手部は、先に形成された半球状土器の体頂部を軽く押しつぶしたのみである。吊手部上面は丸く整えられ、窪みや平坦面の形成は意図されていない。また、体部上部から底端部にかけて内傾するラインを描き、内面の底端部上部にやや強いナデを施されることにより、底端部の器壁がやや厚くなっている。外面はナデによって丁寧に仕上げられている。6 類の K N 型式同様、体部の一側面には孔から下方へ伸びるヘラ記号が確認できる。

## 8 類

G I 型式（郡家一里屋遺跡 区 S D 34 出土資料基準）はやや扁平な方柱状の明瞭な吊手部をもつ。上面には強いナデが施されることにより、緩い窪みと突出した両端部が形成されている。底端部が内傾することにより体部のラインは曲線的になっている。内面の底端部よりやや上位には強いナデが行われ、底端部の器壁がやや厚く仕上げられている。外面はナデにより仕上げられているが、やや指オサエの痕跡が残る。

各類型に共通して認められる時期的な変遷の特徴は、吊手部上面に認められる窪みの形成手法である。出現期である 7 世紀初頭およびやや降る 7 世紀中葉までは、棒状工具による窪みが確認できる。ナデによるものは 7 世紀中葉の S K 2 型式（2 形式）から出現するが、この段階のものはしっかりとした窪みが認められる。この窪みの機能については、「この溝状部分がロープワークに用いられたことも想像に難くない」（西岡 1989）、「上端に縄を固定するくぼみをもつ」（渡部 1994）といった縄（幹縄か）との関連性が想定されているが、現状では推測の域を出ない。やや降る 8 世紀初頭～前半以降にもナデによる窪みが認められるが、それまでとは異なり、「窪み」を強く意識しているとは言い難い。また、平坦面がナデによってつくり出されるのもこの時期である。さらに、6 類のように平坦面すらもたず、吊手部上面が丸みを帯びているものもあり、窪みが機能性を有しているとするならば、この段階でその意味を失ったものと捉えることができる。

なお、この窪みは大阪湾沿岸や播磨灘沿岸地域の釣鐘形飯蛸壺には見られず（註 2）備讃瀬戸地域の特徴として指摘できる。

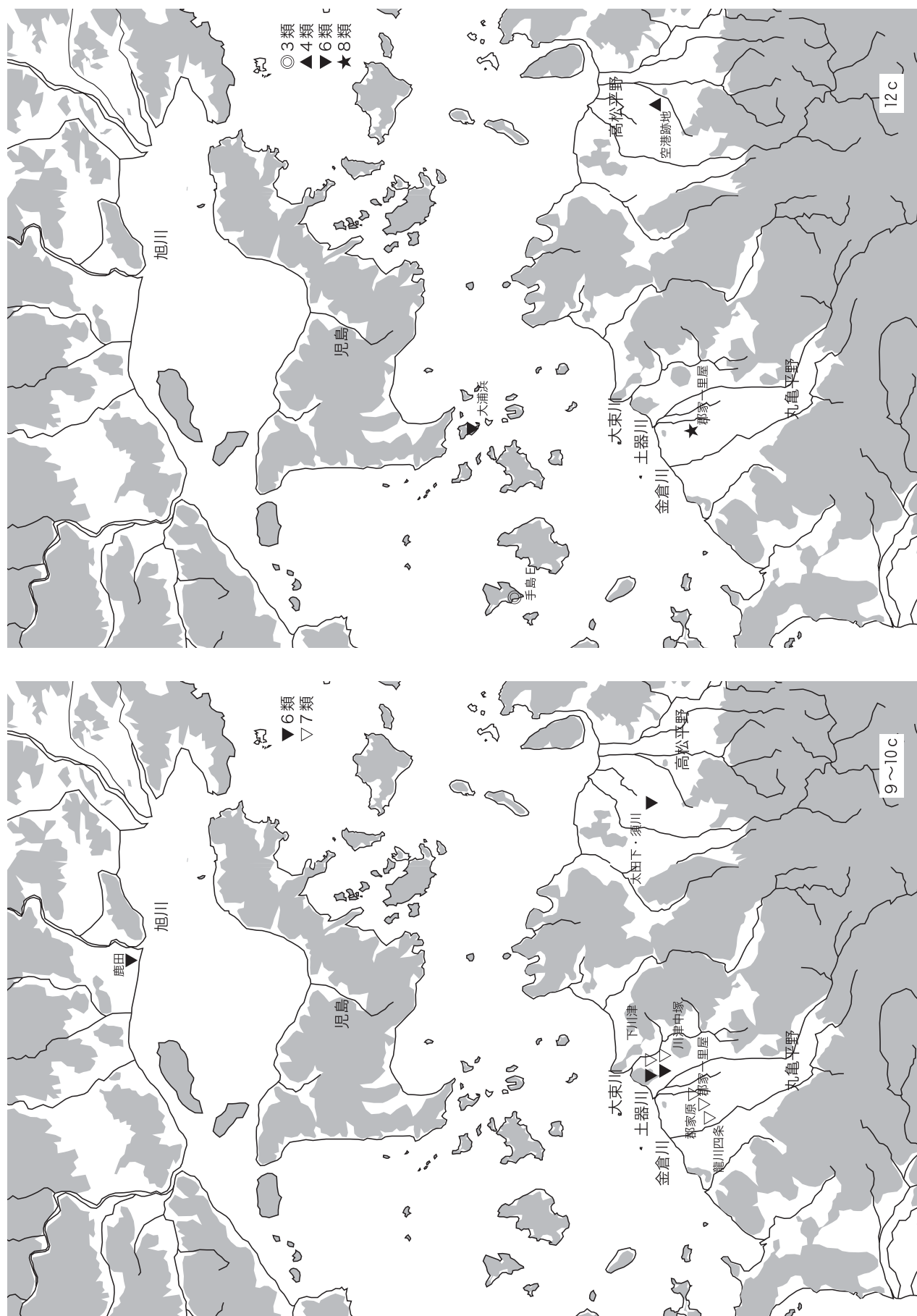
## 3. 分布とその推移

備讃瀬戸および沿岸地域では、下川津遺跡で 7 世紀初頭（T K 209 型式並行期）に S K 1 型式（2 類）が出現する。時期的には微妙であるが、広江・浜遺跡も同時期のものである可能性がある。その後 7 世紀中葉（T K 217 型式並行期）になると、1・2・3・4・5 類が認められ、バリエーションが増加する。ただしこの時期の分布は、児島西部の広江・浜遺跡を除いて、丸亀平野大東川流域の川津地域と金倉川流域に限られる。





第2図 飯蛸壺分布図(1)



7世紀末～8世紀には、それまでとは異なり、高松平野にも遺跡が確認できる。また、丸亀平野でも土器川流域の遺跡に確認され、地域的な広がりが認められる時期である。吊手部のみで型式は不明であるが、7世紀後半の小谷窯跡からも須恵器の飯蛸壺が出土しており、消費地では確認できないものの、飯蛸壺が須恵器窯でも生産されていたことがわかる。

さらにこの時期には、下川津遺跡で焼成土坑が5基確認されている。この焼成土坑は土師器焼成技術と同様であると考えられ、土師器焼成と共用されていた可能性が指摘されている（佐藤1997）。しかし、口ク口の未使用や1型式内における形態の不安定さなどから、飯蛸壺の製作方法が土師器のそれとは大幅に異なる点は間違いなく、焼成は別としても、土師器工人とは異なった集団による飯蛸壺の製作が考えられる。

9世紀～10世紀には、6類および7類に統一される。特に6類のKN型式は丸亀平野だけではなく、高松平野や、本州側の旭川河口の鹿田遺跡にも認められるため、特定箇所で生産されたものが、それま

でよりも広域に流通している可能性が指摘できる。

12世紀～13世紀には、出土遺跡は少なくなるものの、2つの類型に統一されていた前段階とはことなり、複数類型のものが確認できる。その背景には、飯蛸壺の生産・流通体制に変化があったことが窺えるが、10世紀後半～11世紀の資料が確認されていないため、具体的な変化の内容については不明である。

#### 4. 容量と漁期

イイダコ漁は、春期と秋期の2回漁期がある。春期には、産卵をひかえたメスが卵（飯）を有している。一方、秋期は成長途上で、卵（飯）は有していない。現在行われている飯蛸壺縄漁では、漁期によって大小2種類の飯蛸壺を使用しており、秋期には小型のものを、春季には大型（メス用）と小型（オス用）を併用している（註3）。現用飯蛸壺の、小型の容量は80・105m<sup>l</sup>、大型の容量は200・265・375m<sup>l</sup>である（松岡2003）。

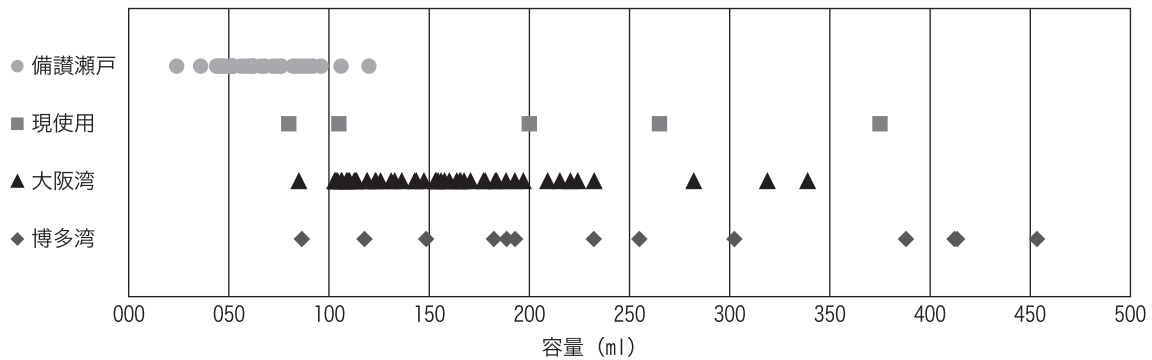
これを参考に、古墳時代後期～中世前半の飯蛸壺縄漁の漁期について検討するため、容量計測を行った（第1表）。また比較資料としてほぼ同時期の大阪湾沿岸地域出土資料と博多湾沿岸地域出土のデータも扱う（註4）。

第1表からは、備讃瀬戸地域出土飯蛸壺の容量が50～80m<sup>l</sup>の間に集中することが読み取れる。100m<sup>l</sup>を超えるものは、川津一ノ又遺跡と小山・南谷遺跡の2個体のみである。一方、大阪湾沿岸地域出土のものについては100～200m<sup>l</sup>に集中し、博多湾沿岸地域についても、やや大きなものを含むが、おおむね100～150m<sup>l</sup>が中心となり、100m<sup>l</sup>以下のものは認められない。

この結果は、地域によってイイダコの体長が異なることを示している可能性がある。ところが、上述のとおり、現用の飯蛸壺も春期に使用する大型のものは100m<sup>l</sup>以上であり、容量の差異は漁期の違いに求めるのが妥当であろう。つまり、古墳時代後期～中世において、備讃瀬戸地域の飯蛸壺は秋期に使用され、その他の2地域は春季の産卵期を控えたメスを主な捕獲対象とした漁を行っていたということである。

ただし現在の飯蛸壺縄漁には、やきものの飯蛸壺のみではなくアカニシの殻などが併用されており、近世以降の絵図に描かれた飯蛸壺縄漁にも貝殻の使用が描かれていることには注意を払う必要がある。つまり、備讃瀬戸地域においても、アカニシの殻などを利用した春季のメスを対象とした漁が行われていた可能性を想定する必要があるのではないだろうか。山本氏は、おそらく聞き取りによるものである





第1表 地域別飯蛸壺容量グラフ

うが、秋季にはやきものを、春季にはニシ殻を利用する現状を確認している（山本1969）。

真野氏は、飯蛸壺出現の背景について、当初貝殻製の飯蛸壺が存在し、その後やきものへ変化するという論に反対し、貝殻の利用は他地域から導入され、やきものから貝殻への変化を考えている。この根拠となっているのは、「現在、瀬戸内海一帯で最も多く貝殻利用飯蛸壺に使用されているアカニシは、瀬戸内海には多量に利用するほど生息して」いない（真野1989）点であるが、香川県内を中心に遺跡出土の貝殻を検討した西岡氏が、中世後半～近世初頭以前にはアカニシが多量に捕獲されていたと結論づけている（西岡1998）。そのため、古墳時代後期～中世において、備讃瀬戸地域ではやきものの飯蛸壺と共に、アカニシ殻が併用されていたことは十分に考えられる。さらに推論を重ねるが、アカニシ殻で不足したものをやきもので補ったとすれば、主としてアカニシ殻を利用し、容量の小さなものについてはやきものを利用したとも考えられる。そうであれば、当時の飯蛸壺縄漁が秋期のみではなく、春期にも行われていたことも想定できるのではないだろうか。

## 5. おわりに

本稿では、備讃瀬戸地域出土の飯蛸壺について、分類や変遷といった基礎的な分析を行い、容量分析から推測される有機物性の飯蛸壺の併用の可能性について述べた。

備讃瀬戸地域の島嶼部や海浜部から飯蛸壺が多く採取されることはよく知られている。しかし、飯蛸壺のみでは、その遺跡の時期決定を行うことは事実上不可能であり、遺跡の評価も困難であった。しかし、本稿で検討した飯蛸壺の変遷とその特徴から、飯蛸壺が採取された遺跡に時期を付与することが可能となり、島嶼部を含めた備讃瀬戸地域一帯の歴史を復元するための基礎的な資料となりうるのではないかと考える。

本稿を成すにあたっては下記の方々からの多大なご教示、ご協力を賜りました。記して感謝いたします。

岩井顕彦・大久保徹也・加納裕之・佐藤竜馬・高田浩司・中橋貞光・西岡達哉・信里芳紀・松岡宏一・山崎頼人（敬称略・五十音順）

## 註

- 1 手島を踏査し、資料を採取した大久保徹也氏のご教示による。
- 2 全ての資料を確認した訳ではないが、埋蔵文化財研究会編1986『海の生産用具 - 弥生時代から平安時代まで - 』掲載の図面で確認した。また、近畿地方の資料については山崎頼人氏のご教示を得た。
- 3 2001年3月、松岡宏一氏とともに小豆郡土庄町の漁師中橋貞光氏のもとを訪れ、実際に飯蛸壺縄漁を行っている現場を調査させていただき、その際にうかがったことである。
- 4 備讃瀬戸地域のデータについては、遺跡出土の飯蛸壺を全て計量した。博多湾沿岸地域のものについては、箱崎遺跡、博多遺跡群、三苫遺跡、姪浜遺跡、有田遺跡、生の松原遺跡出土資料の一部について松岡宏一氏とともに計量を行った。大阪湾沿岸地域のデータは、松岡宏一氏が計量したもののうち、陶邑古窯跡群、大園遺跡出土資料について提供して頂いたものを使用した。

## 引用・参考文献

- 大久保徹也 1990「蛸壺および蛸壺焼成土坑」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 下川津遺跡』香川県教育委員会ほか
- 佐藤竜馬 1997「近畿以西」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地 』香川県教育委員会ほか
- 西岡達哉 1989「包含層出土の遺物」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 稲木遺跡』香川県教育委員会ほか
- 西岡達哉 1998「巻貝から二枚貝へ - アカニシの出土量の減少について - 』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要 』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 西口陽一 1989「大阪・イイダコ壺」『考古学研究』第36号第1巻 考古学研究会
- 松岡宏一 2003「古代の飯蛸壺縄漁に関する一考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第16号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 真鍋篤行 1994「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第7号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 真野修 1989「原始・古代の飯蛸壺縄漁の検討」『神戸古代史』No.8 神戸古代史研究会
- 森浩一 1950「大阪湾沿岸の飯蛸壺形土器とその遺跡」『古代学研究』2 古代学研究会
- 森浩一 1963「飯蛸壺型土器と須恵器生産の問題」『近畿古文化論攷』
- 山本慶一 1969「備讃瀬戸海域より引揚げられる古式タコ壺について」『物質文化』14
- 和田晴吾 1982「弥生・古墳時代の漁具」『小林行雄博士古希記念論文集 考古学論考』平凡社
- 渡部明夫 1994「原始の漁業」『香川県漁業史』香川県漁業史編さん協議会

## 引用遺跡文献

- 阿津走出遺跡：下澤公明・内藤善史 1988『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71 本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査 』岡山県教育委員会／稲木遺跡：西岡達哉編 1989『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 稲木遺跡』香川県教育委員会ほか／大浦浜遺跡：大山真充・真鍋昌宏 1988『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 大浦浜遺跡』香川県教育委員会ほか／川津一ノ又遺跡：片桐孝浩 1997『中小河川大束川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会ほか・山下平重 1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会ほか・古野徳久 1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会ほか／川津川西遺跡：信里芳紀 2000『国道438号川津橋橋梁工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会ほか／川津中塚遺跡：西岡達哉編 1994『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第14冊 川津中塚遺跡』香川県教育委員会ほか／仲村廃寺：笹川龍一 1989『仲村廃寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～』善通寺市教育委員会文化振興室／空港跡地遺跡：蔵本晋司編 1997『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 空港

跡地遺跡』香川県教育委員会ほか／小谷窯跡：信里芳紀 2002『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塚谷古墳』香川県教育委員会ほか／金蔵寺下所遺跡：廣瀬常雄 1994『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊 金蔵寺下所遺跡』香川県教育委員会ほか／郡家一里屋遺跡：和田素子 1993『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第12冊 郡家一里屋遺跡』香川県教育委員会ほか／郡家原遺跡：山下平重編 1993『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第13冊 郡家原遺跡』香川県教育委員会ほか／鹿田遺跡：松木武彦・山本悦世 1993『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター／下川津遺跡：藤好史郎・西村尋文編 1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 下川津遺跡』香川県教育委員会ほか／正箱遺跡：廣瀬常雄編 1994『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会ほか／龍川四条遺跡：西岡達哉編 1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊 龍川四条遺跡』香川県教育委員会ほか／手島E：大久保徹也 2002「塩飽諸島の海浜部遺跡踏査の成果」『徳島文理大学文学部共同研究 塩飽諸島』徳島文理大学文学部文化財学科／西久保谷遺跡：小野秀幸・石原徹也 2001「西久保谷遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成12年度』香川県教育委員会ほか／広江・浜遺跡：間壁忠彦・間壁葎子・藤田憲司 1979「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号 財団法人倉敷考古館

## 備讃瀬戸及び沿岸地域出土の飯蛸壺

乗松真也

備讃瀬戸の島嶼部、及び香川県側の沿岸地域では、古墳時代後期に「土器」の飯蛸壺が出現する。本稿では、古墳時代後期～中世における遺跡出土の飯蛸壺について、当該地域の形態的特徴を明らかにし、地域内での変遷を追った。さらに容量分析から、「土器」の飯蛸壺の使用が、春季のオス対象と秋季とに限定されたものであり、春季にはアカニシの殻などの有機物が飯蛸壺として併用された可能性を指摘した。

## Iidako Trap Excavated in Bisan Seto And Its Coastal Regions

Shinya Norimatsu

In the area of Bisan Seto Island and the Kagawa seaboard, iidako trap, the earthenware in the late Tumulus period, were found. As for the iidako trap excavated in the period between the late Tumulus and the Middle Ages, this article explains the morphological character of this area and pursues the changes in this area. Moreover according to the analysis of volume, it also indicates that the usage of earthenware, iidako trap, is limited to the female iidako in Spring and iidako in Autumn and it is also possible that in spring organic materials such as the shell of spiral shellfish were also used as iidako trap.

## 备赞瀬户及其沿岸地区出土的饭蛸壶(Iidako trap)

乗松 真也

在备赞瀬户的岛屿部及香川县一带的沿岸地区、被发现有古坟时代(Burial Mound age)后期的“土器”饭蛸壶。本文针对被出土的古坟时代后期~中世纪的饭蛸壶、明确阐述了该地区的形态特征、并追溯了该地区的变迁。进而通过容量分析(volumetric analysis)、指出了“土器”饭蛸壶的使用只限于春季的雄性章鱼和秋季、而且、当时有可能曾在春季将脉红螺(Rapana venosa)的壳作为饭蛸壶一起使用。

## 비산세토 및 연안 지역 출토의 꼴뚜기 단지

노리마츠 신야

비산세토의 크고 작은 섬들 및 가가와현 측의 연안 지역에서는 고분 시대 후기에「토기」꼴뚜기 단지가 출현한다. 본 고에서는 고분 시대 후기~중세에 있어서의 유적출토의 꼴뚜기 단지에 대해서, 해당 지역의 형태적 특징을 분명히 하고 지역내에서의 변천을 조사해 왔다. 게다가 용량 분석에서「토기」꼴뚜기 단지의 사용이 춘계의 수컷 대상과 추계로 한정된 것이고, 춘계에는 아카니시의 껍질등의 유기물이 꼴뚜기 단지로서 병용되었을 가능성을 지적했다.